

真福寺貝塚(しんぷくじかいづか)について

昭和50年に国史跡に指定された関東地方の縄文時代晩期の遺跡



真福寺貝塚遠望 (新編埼玉県史資料編1より)



真福寺貝塚出土のミミズク土偶



さいたま市教育委員会によると

真福寺貝塚は、縄文時代後期から晩期（今から約3500年から2800年前）にかけて営まれた貝塚・集落跡である。大正時代から幾度となく発掘調査が行われ、縄文時代の様子を伝える貴重な遺物が出土する遺跡として国史跡に指定された。台地には貝塚が直径100mの円形に分布し、多数の住まいの後の存在も予想される。貝塚には当時の人が食べた貝、動物、魚の骨が残され、低地にはカゴやクルミやトチの実等植物性の遺物が残されている。

真福寺貝塚遺跡は、標高8mの斜面に位置しており、縄文時代後期から晩期の遺跡で特に低地の部分は低湿地遺跡として名高い。大正末年以来の数回の発掘によって住居跡をはじめ多数の遺物が発見され、特に土偶・土板・耳飾・石剣などいわゆる珍品が多数出土している。また低湿地の泥炭層中からは、クリ・クルミ・ウリの種子などの貴重な資料も発掘されている。昭和50年7月19日、18,235平方メートルが国指定史跡となった。

この場所は、骨角牙器や土器、石器、貝殻などが大量に地表に露出していたので、昔の住居跡であることは早くから知られていた。遺跡の科学的な発掘調査が初めて行われたのは、大正15年(1926)になってからである。それから昭和40年(1965)まで、小規模な学術調査が20数回も繰り返し実施された。こうした調査によって、真福寺貝塚遺跡は、台地の上の集落遺跡と谷部分の泥炭層遺跡から構成されていること、集落跡には5軒から8軒の住居が円形に配され、貝塚を伴っていることなどが明らかになった。

大正15年(1926)に発掘調査を実施したのは、大山柏氏を中心とする大山史前学研究所である。この最初の発掘調査は貝塚の北端に近い場所で行われ、ニホンシジミやヤマトシジミなどを主とする主淡貝塚であることを明らかにした。さらに、打製・磨製石斧や石鏃、石棒、石剣、耳飾り、土偶、土版、骨角器など豊富な遺物を出土したことで、真福寺貝塚の名が全国的に知られるようになった。

